

ホールアース自然学校 遊牧民キャンプのルーツ

1. 日本が失った価値と「遊牧民キャンプ」の誕生

1年を通じて数多くの人々が訪れる「遊牧民キャンプ」。今ではすっかり定番になったこのキャンプは今から28年前の1983年に産声を上げました。

当時、日本は高度経済成長の只中にありました。急速な経済発展が金銭的な豊かさと共に私たちにもたらしたのは、自然の破壊、そして脈々と受け継いできた自然の中で暮らす「知恵」の喪失でした。都市近郊では身近な自然が次々と失われ、田舎では都市への人口流出と、過疎化による自然の荒廃が進行しました。現在、こうした時代の只中に生まれた子どもが親の世代になり、子どものみならず親の世代も、野山を駆け回ったという「原体験」が不足しています。そして、人間が自然とかけ離れた存在になってしまった結果、社会に様々なひずみ生まれ始めています。凶悪な犯罪や陰湿ないじめなどの社会問題は、これら経済発展がもたらした負の側面と無縁ではないでしょう。

ホールアース自然学校の創業者である広瀬敏通（通称：アッパー）は、20代の頃に一つ屋根の下で家畜と暮らしながらデカン高原を開拓したインドでの生活や、シルクロードで出会った遊牧民たちの生活に共感を覚えました。そして、衣食住のすべてが自然と共にあり、人間の力が及ばない「大きな力」に逆らうことなく生きる術を心得ている彼らを見て大きな影響を受けました。日本が失った価値は、まさに遊牧民たちの暮らしの中にあると感じた彼は、帰国後、日本の子どもにそうした思いを伝えるべく、富士山麓で自ら家畜動物を飼いながらキャンプを始めます。それが現在まで続く「遊牧民キャンプ」のルーツです。

2. 遊牧民キャンプ・3つのねらいと4つの特徴

キャンプは小さな“社会”です。キャンプは家での快適な生活と違って不便です。ただ一方で、そうした不便を楽しむ場でもあります。子どもたちは不便な生活の中で、自ら考え工夫することで、自ら行動することの大切さ、仲間や親のありがたさを感じながら多くを学びます。初めて参加する子どもたちは、普段の生活と180度違う生活に初めは戸惑いつつも、キャンプという小さな社会の中で、次第に生き生きと“自分らしさ”を発揮し、成長していきます。

私たちは子どもがキャンプを通じて逞しく成長する場面を幾度となく目にしてきました。キャンプが長期になればなるほど、その変化は顕著に現れます。私たちはキャンプを通じて子どもたちに以下のような素養を身につけてもらうことを主眼に置いています。

3つのねらい：

自分以外の他者や自然、生き物たちに「思いやりを持つ」
世の中には様々な世界や価値観があることを「知る」
物事を自ら考え、「行動」できるようになる

キャンプといういわば小さな社会の中で、参加者一人ひとりがこれらの素養を身に付け、「自分らしくよりよく生きる」と。その積み重ねが持続可能な社会を作っていくと私たちは考えています。ホールアース自然学校では、こうした社会を支える人の心の「根っこ」を育てるために、年齢・対象に応じて様々なキャンプを行っています。それらに共通する特徴は以下の通りです。



特徴その1 本格的な自然体験

大いなる自然を前にすると、人はその偉大さに圧倒され、自分の小ささを肌で感じ、謙虚な気持ちになります。昔から人は自然の驚異を怖れ、祈り、また自然の恵みには感謝しながら生活してきました。大いなる自然の営みを全身で感じることで、動物としての本能が呼び覚まされ、五感が研ぎ澄まされます。世の中で行われているキャンプは、「野外での集団行動を通じた人間形成」に主眼に置いたもの - つまり、朝時間通りに起き、食事の支度を皆で協力して行い、残さず食べるといった - がいわば主流です。遊牧民キャンプは、もちろん上記のような側面も含んでいますが、それよりむしろ、本格的な自然体験を通じて、「人間も自然の一部である」という感覚を育むことに主眼を置いています。

その2 小人数制・グループ編成をしない

遊牧民キャンプでは、基本的にグループ(班)編成をしません。

グループ編成のメリットは子ども達にとっては班のメンバーと深い関係ができること、スタッフにとっては管理がしやすく大人数が対応可能だということ等があり、世の中で行われているキャンプはこうしたグループ行動を基本とするものが大半です。しかし遊牧民キャンプは、こうした決まったメンバーだけの関わりではなく、キャンプに参加している子どもやスタッフ、大学生リーダー等がまさに遊牧民の大家族のように係わり、普段通っている学校や塾だけでは築けない人間関係を育むことで、多様性を認め、社会性を身につけるキャンプを目指しています。当然、スタッフも参加者全員に目を配る必要があるため、一つのキャンプの人数はキャンプによって多少異なるものの、概ね25 - 30人と比較的少人数で行っています。

その3 夢中になる時間の大切さ

遊牧民キャンプは予めプログラムの内容が示されていますが、天候や子どもたちの状況によって大胆に組み替えていきます。初めに決められたものから180度変わってしまうこともしばしばです。遊牧民キャンプでは、子どもたちが「夢中になる時間」を大切にしています。例えば、子どもが何かに熱中している時にご飯の時間が来てしまった場合でも、すぐに時間切れで打ち切ることはせず、子どもの様子を見ながら臨機応変に対応します。もちろんキャンプは集団生活なので最低限のルールはありますが、心ゆくまで何かにのめりこむことが子どもたちの好奇心を育み、主体性の芽を伸ばすことにつながると私達は考えています。

その4 家畜動物とのふれあい

ホールアース自然学校には馬やヤギ、ニワトリ、ウサギなどの家畜動物がいます。キャンプ中、子どもたちは朝夕必ず動物たちのお世話をします。初めは恐る恐る近づいていた子どもたちも、次第に慣れ、動物たちとの関係を肌で学んでいきます。動物たちの糞は肥料になり、畑に施肥され、作物となって人間の口にに戻ります。人間が残した野菜クズは再び動物たちが食べます。そうした小さな「命の循環」に触れることで、子どもたちは人間と動物や植物との関係を実感し、命の大切さを学びます。時にはその動物たちの命をいただき、命の尊さを感じるプログラムも実施しています。

上記に加え、遊牧民キャンプでは単にプログラムを体験するだけではなく、キャンプの最終日に向けて、自分が過ごした時間とその体験をふりかえる時間を参加者全員で持つようにしています。自分の中だけでそのまま感じたことを持ち帰るだけでなく、他の参加者が感じたこと、スタッフのおもいなどの意見交換をすることで、自分だけでは気づけなかった体験の意味を深く理解し、日常生活での環境行動への第一歩となります。「自然を守る」「地球環境を保全しよう」と口で言うのは簡単ですが、私たちはキャンプを通じて心の底からこれらを実感し、行動を起こせる人を、これまでも、そしてこれからも育てていきたいと思っています。

ホールアース自然学校は、今後も大自然のフィールドを使ってより楽しく、より質の高いプログラムを実施していきます。親御さんにおかれましては、今後も遊牧民キャンプを今まで以上にご理解、ご支援賜りたくお願い申し上げます。スタッフ一同心よりお待ちしております。